

第4回国民文化祭さいたま89協賛事業

第21回市民文化祭

越谷市郷土研究会

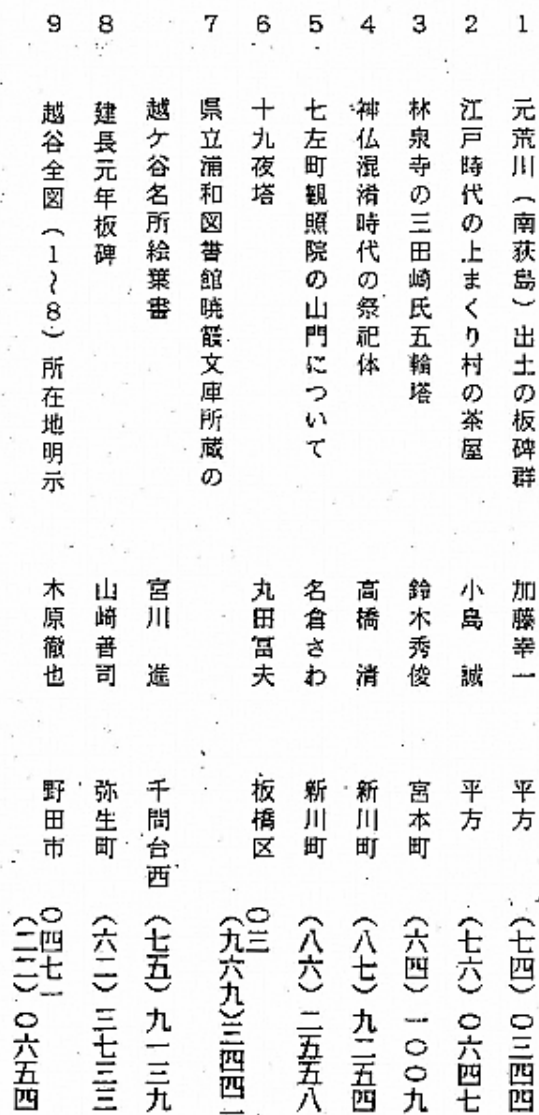
出品紹介

平成元年度

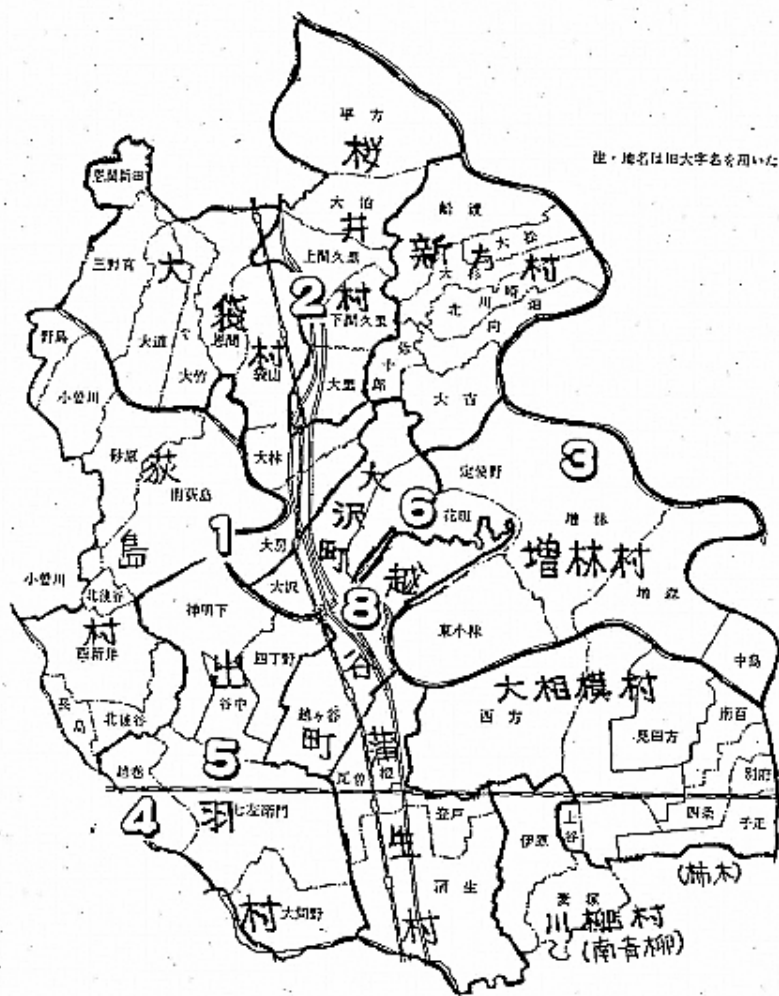
会 場 越谷コミュニティセンター

開催日時 11月23日(木)～26日(日)の4日間

文化祭展示 作品リスト



越谷市旧地名略图



1 元荒川(南荻島)出土の板碑群

越谷市 平方 会野川 39-5 加藤 幸一

1. 板碑の本場 埼玉県

板碑は、板石塔婆とか青石塔婆とも言われ、自分の死後の冥福を祈る逆修供養、あるいは死者の冥福を祈る追善供養のために建てる石でできた供養塔である。

最古の板碑が荒川流域近くの埼玉県江岸村の大沼公園弁天島で発見されるなど、ごく初期の板碑が埼玉県大里郡・北埼玉郡・北足立郡の荒川に近い地域に分布していることから、板碑の発祥地は荒川中流域と考えられている。その板碑の石材として、荒川上流の秩父地方で採れる、板状にはがれやすい性質をもち緑泥片岩が利用された。これらの板碑を武蔵型板碑といい、埼玉県内を流れていた当時の荒川流域を中心に、埼玉県の他に東京都全域、群馬・栃木・茨城の各県の南部、千葉県西部、神奈川県東部などに分布している。これらは全国でも最も形態が整っていて、最も多くみられる。つまり、武蔵型板碑は管轄とも全国一を誇っているのである。特に埼玉県は板碑の本場といえる。埼玉県教育委員会が昭和51年10月から56年3月までの5年間の月日をかけての板石塔婆緊急調査によると、昭和55年9月30日現在で20,201基を確認している。

2. 越谷市の板碑

板碑は川を利用して各地に運ばれたと考えられている。越谷市内を貫通している元荒川は当時の荒川主流であったため、市内各地に板碑が豊富にみられる。昭和44年発行の「越谷市金石資料集」によると、九十六基及び破片四十数個が確認されたという。また、6年後の昭和50年発行の「越谷市史第一巻 通史上」によると、総数134基確認(破片を除く)されたという。その後、かなり発見されていよう。再調査が必要である。

3. 元荒川出土の板碑群発見のいきさつ

昭和47年(1972)6月17日の夕方近くに、南荻島農協倉庫前の元荒川の中州より、桃木源之助氏(神明2-235、大正11年4月生まれ)によって大量の板碑が偶然にも発見される。その中州は現在はない。

その日、小舟で源をしていた桃木氏が、最後に投網を引き上げて源を終わりにしようとしたところ、その投網に板碑がひっかかったことがきっかけである。幸いなことに元荒川の水量が少なく浅かったため、大量の板碑を小舟に引き上げ、自宅に持ち帰って年号を見ようと表面のどろを洗い落とす。これらの板碑の中に、金文字のあるものもみられた。

のち、桃木氏は四丁野の延福院(宮本町2-54、塚田有祥住職)に預ける。その後、当時の福祉会館(現、越谷2-2)にあった市史編纂室に保管されるが、最終的には昭和56年に見田芳造路公園に越谷市立郷土資料収蔵館が完成したのを機会に、同年4月16日にここに移され、今日に至っている。

なお、桃木氏及び塚田住職によると、発見した地点にはまだまだ多くの板碑が埋もれているであろうとのことである。埋もれたままになっているその他の板碑の採集が望まれる。

4. 元荒川(南荻島)出土の板碑の数

年号の解読できる板碑 ----- 22基

内訳 (ほぼ定形の板碑 15基 (うち3基は基部欠落)

欠落した板碑 7基

年号はわからないが、供養者名のわかる欠落した板碑 -- 2基

一部解読できる欠落した板碑 ----- 7基

破片・その他 ----- 7基

※康正3年(1457)から明応8年(1499)にかけての板碑群である。この頃の特色は逆修供養が圧倒的であり、一基に一人の供養者名が刻まれ、その戒名も禅門・禅尼が主流。元荒川出土のこれらの板碑群はその例にもれない。



元荒川(南坂島)出土の板碑群 - 一覧表

○印はほぼ完成形の板碑

No.	年号	西暦	月日	高さ	幅	主尊	供養者名	備考
①	康正3年	1457	4月9日	62.4	17.8	弥陀一尊	妙真禪尼	
2	康正3年	1457	7月3日	41.0	17.8	不明	道金禪門	上部欠落
③	寛正4年	1461	2月24日	47.8	13.7	弥陀一尊	妙心禪尼	二条線なし
④	寛正4年	1461	9月5日	35.9	14.9	弥陀一尊	妙□禪尼	基部欠落
⑤	寛正7年	1466	7月28日	51.1	14.9	弥陀一尊	妙□禪尼	二条線なし
6	寛正年間			15.5	11.3	弥陀一尊	不明	上・下部欠落
⑦	応仁元年	1467	2月8日	73.5	18.5	弥陀三尊	妙心禪尼	
⑧	応仁3年	1469	9月16日	86.3	21.1	弥陀三尊	妙真禪尼	光明あり
⑨	文明3年	1471	9月12日	43.4	13.4	弥陀一尊	妙真禪尼	二条線なし 「世修」あり
⑩	文明5年 (安政)	1473	7月□日	46.9	13.1	弥陀一尊	性祐禪門	月輪あり
⑪	文明7年	1475	2月10日	54.2	17.9	弥陀一尊	道光禪門	
12	文明7年	1475	□月8日	23.6	14.0	不明	□□禪尼	上部欠落
⑬	文明9年	1477	7月18日	44.8	14.9	弥陀一尊	道金禪門	
14	文明9年	1477	10月	38.0	17.2	弥陀三尊	応妙禪尼	上部欠落 「世修」あり
15	文明9年	1477		45.4	17.2	弥陀一尊	妙□禪尼	右側欠落
⑬	文明10年	1478	9月18日	40.2	12.2	弥陀一尊	慈教禪門	
⑰	文明18年	1486	2月吉日	65.9	21.1	弥陀三尊	妙心禪尼	「世修」あり 金泥あり
⑱	文明19年	1487	5月17日	53.2	19.9	弥陀三尊	圓□禪門	二条線なし 基部欠落
⑲	文明19年	1487	10月22日	56.4	17.5	弥陀一尊	妙心禪尼	二条線なし 金泥あり
20	文明年間			42.6	23.1	弥陀三尊	不明	下部欠落 金泥あり
21	文明年間		12月20日	22.3	11.9	弥陀一尊	道□□□	下部欠落 金泥あり
⑳	明応8年	1499	正月□8日	54.9	21.4	弥陀三尊	妙真禪尼	基部欠落
23	不明		正月1日	31.7	15.6	不明	妙心禪尼	上・左欠落
24	不明		6月18日	30.6	14.9	不明	□教禪門	上・左欠落

— 2 —

1. 康正3年(1457)

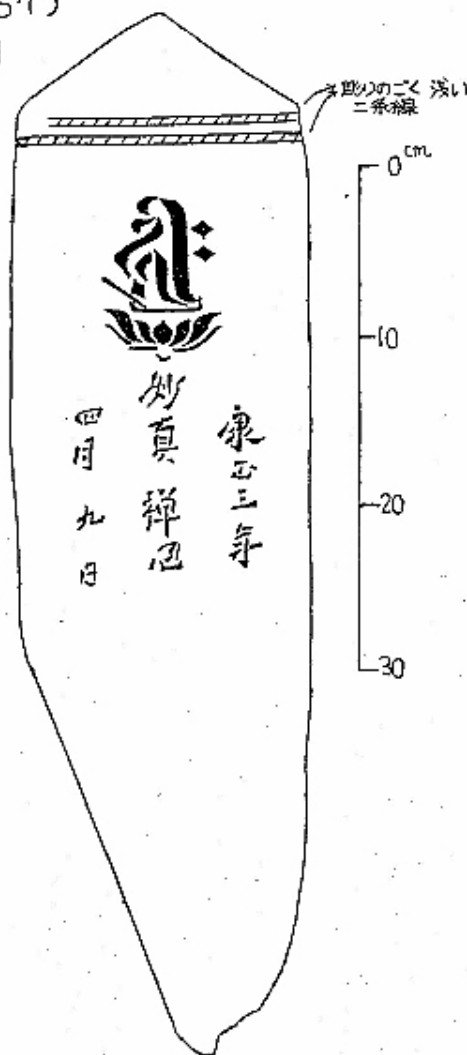
4月9日

弥陀一尊種子板碑

尼:

妙真
禪尼
四月九日
康正三年

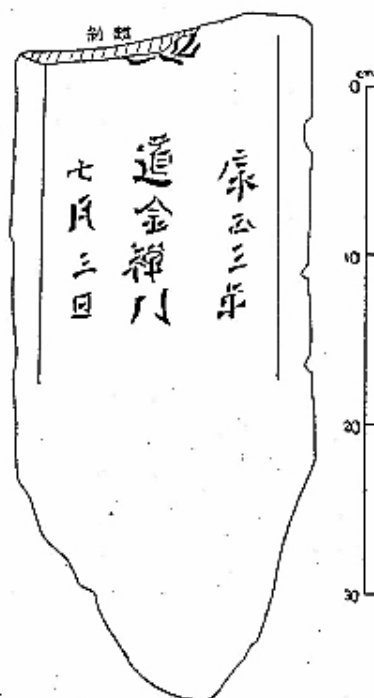
※ 妙真禪尼という戒名を持つ女性が、康正3年4月9日に逆修供養したのであろう。二条線の彫りが浅いのは後期の板碑にみられる特色である。なお、蓮台上部に花心がみられる。



2. 康正3年(1457) 7月3日

主尊不明

康正三年
道金禪門
七月三日



※ 道金禪門という戒名を持つ男性が、康正3年7月3日に逆修供養したものであろう。

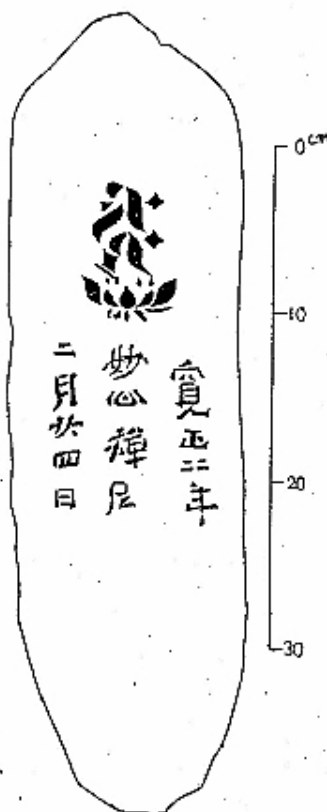
3. 寛正4年(1461) 2月24日

弥陀-尊種子板碑



寛正四年
妙心禪尼
二月廿四日

この板碑には二条線が刻まれていない



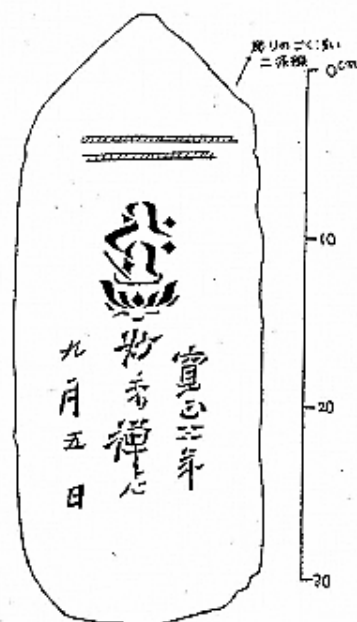
※ 妙心禪尼という戒名を持つ女性が、寛正4年2月24日に逆修供養したものである。妙心禪尼と刻まれた板碑は、この他に、No.7, No.17, No.19, それに、年号不明の板碑に1基みられる。また、元荒川出工の板碑の他に、四丁野迎根院保管の文明17年(1485)3月10日の板碑にも供養者名は妙心禪尼となっている。すべて同一人物であろうか。なお、昭和62年2月頃、西方大聖寺境内でみづかった永禄元年(1558)の板碑には、妙心禪尼の戒名がみられるが、年代がはなれているため別人であろう。

4. 寛正4年(1461) 9月5日

弥陀一尊蓮子板碑



九月五日
妙□禪尼
寛正二年(四)



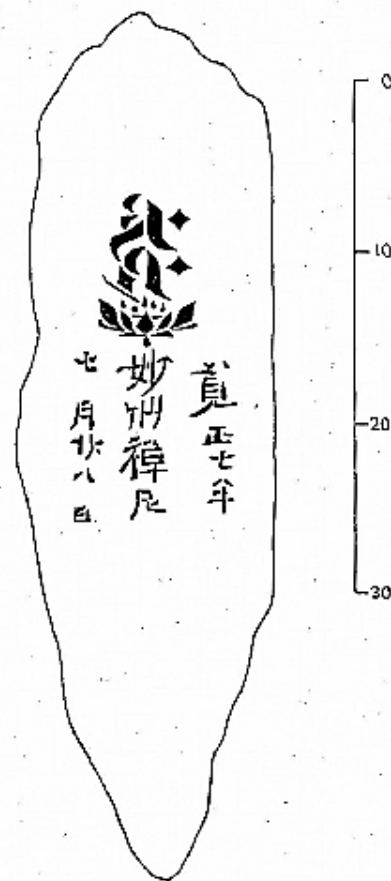
※ 妙□禪尼という戒名を持つ女性が、寛正4年9月5日に逆修供養したものであろう。蓮台上部に花心が描かれ、板碑上部には、二条線がかろうじて刻まれている。

5. 寛正7年(1466) 7月28日

弥陀一尊蓮子板碑

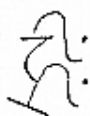


七月廿八日
妙□禪尼
寛正七年

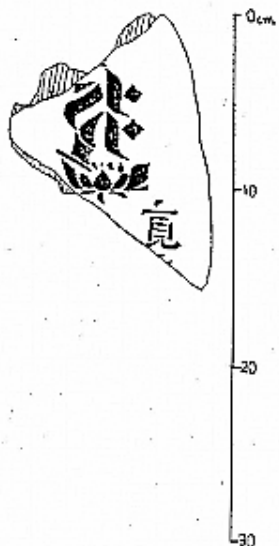


※ 妙□禪尼という戒名を持つ女性が、寛正7年7月28日に逆修供養したものであろう。上部には二条線がみられないが、このように二条線の消失は後期にみられる傾向である。

6. 寛正年間



寛
正



※寛正年間に建立された弥陀
一尊種子板碑の破片である。

＝ なぜ河川敷から一度に多数出土したのか ＝

板碑は、よく墓地などの土中や河川敷から一度に多数発見することがある。板碑の建立は慶長年間以降全く絶えてしまうことから、徳川氏の関東入国に際し、政策上より従来の歴史を湮滅するため、例えば、旧来在住の土豪らが由緒を知られることを恐れて板碑を埋没したとの俗説があるが疑わしい。板碑の信仰が人々から忘れられ、土中に埋没されたり、川に捨てられたりしたのであろうか。千々和実氏によると、板碑埋没の理由を「この城下町に集まった地主たちこそ、中世を通じて、主として板碑を建立した階層である。彼らはこの板碑を在地に残して城下町に去ったから、無縁となった板碑は在地農民によって埋没された。いわば中世の大清算である。」(ニュー・サイエンス社「板碑研究入門」)としている。板碑埋没の理由はなぜに包まれていて、今だによくわかっていない。

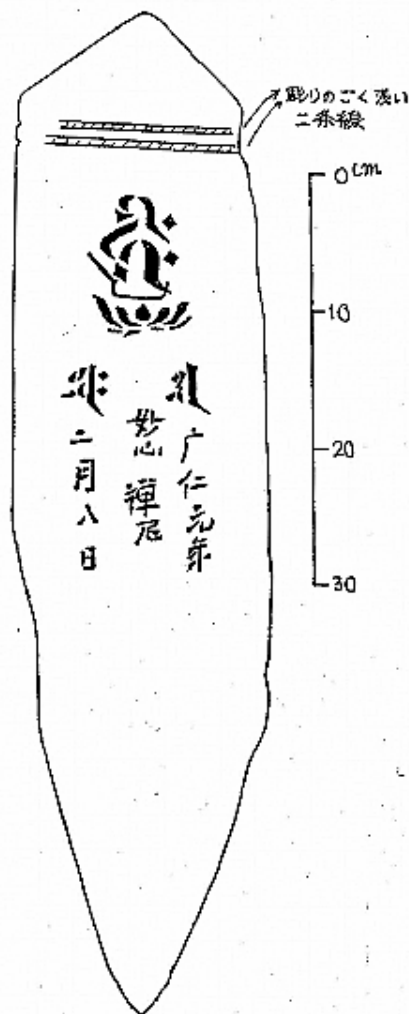
南荻島の元荒川で大量の板碑が埋もれているのはなぜなのか。つまるところ、よくわからないのであるが、元荒川(当時は荒川本流)の自然堤防上に発達した村落に住む有力者である土豪はもちろん、信仰熱心で裕福な名主(みょうしゅ)クラスの庶民の男女が、寛正年間から明和年間にかけての四・五十年間に、自分たちの逆修供養のため板碑を建立したものが、板碑信仰が忘れられた江戸時代の人々によって、この川に大量に捨てられたのではあるまいか。これらの板碑の中には、古志賀谷氏などの土豪たちの戒名も刻まれているのであろう。

7. 応仁元年(1467) 2月8日

弥陀三尊種子板碑



乙未 妙心
二月 八日
八日 妙心
禪尼
禪尼
禪尼



※ No.3 の板碑に刻まれている妙心禪尼が
応仁元年2月8日に
も逆修供養をした
のであろう。蓮台の
上部に花びらがみられ
る。

8. 応仁3年(1469)

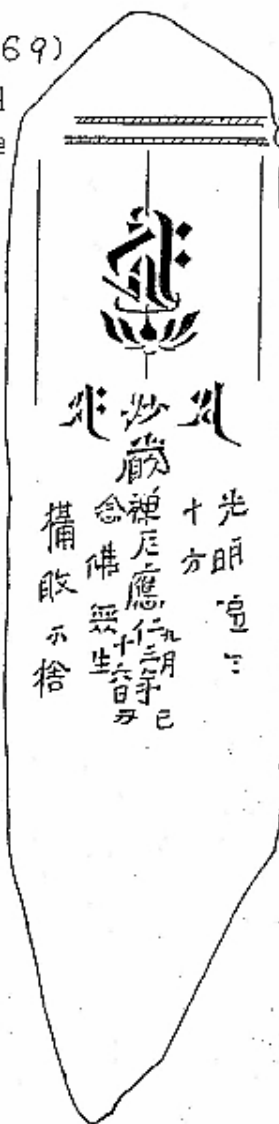
9月16日

弥陀三尊種子板碑



光明遍照
十方世界
念仏衆生
攝取不捨
妙巖
禪尼應仁
三年九月
十六日
己未

※弥陀板碑にしか刻まれない「光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨」という偈文がみられる。妙巖禪尼という女性が応仁3年9月16日に逆修供養したものであろう。蓮台上部に花心がみられる。



彫りのごく浅い
二条線

0 cm
10
20
30

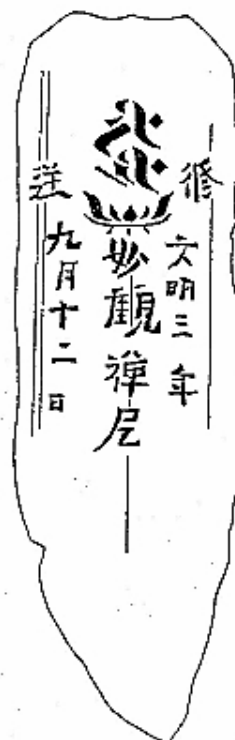
—6—

9. 文明3年(1471) 9月12日

弥陀一尊種子板碑



修
文明三年
妙觀
禪尼
逆
九月十二日



0 cm
10
20
30

※ 妙觀禪尼という戒名を持つ女性が、文明3年9月12日に逆修供養したものである。
この板碑には、二条線がみられない。

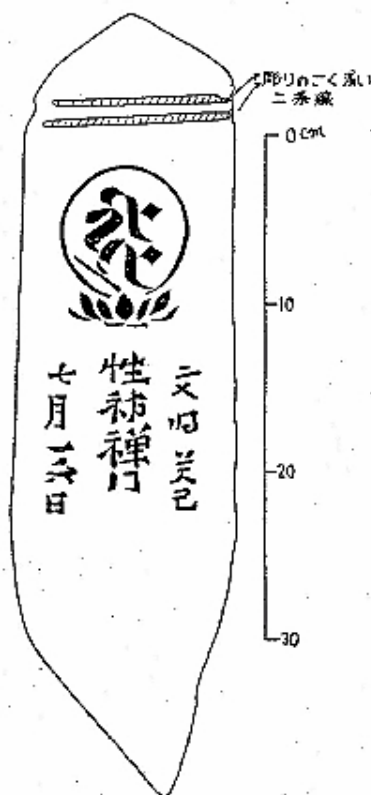
10. 文明5年(1473) 7月³日

弥陀一尊種三板碑



文明⁵年
性祐禪門
七月三日

※ 性祐禪門という戒名を持つ男性が、文明5年7月に逆修供養したものであろう。主尊キリークのまわりに月輪が描かれている。



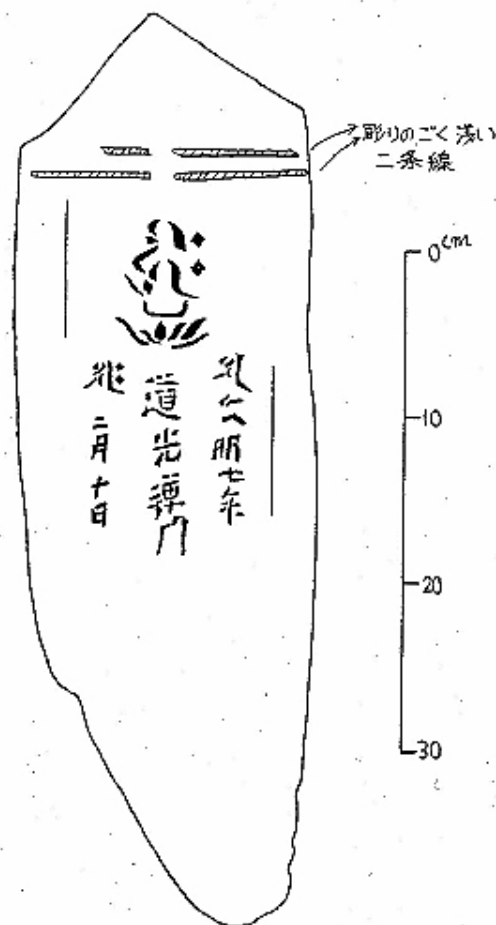
11. 文明7年(1475) 2月10日

弥陀三尊種三板碑



文明⁷年
道光禪門
二月十日

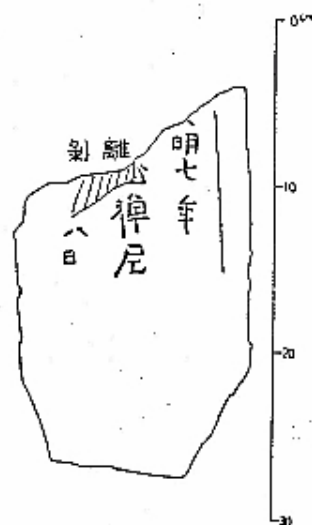
※ 道光禪門という戒名を持つ男性が、文明7年2月10日に逆修供養したものであろう。



12. 文明7年(1475) □月8日

主尊不明

□ 文明七年
□ 心? 禪尼
八日



※ □□禪尼という戒名を持つ
女性が、文明7年に逆修供
養したものであろう。

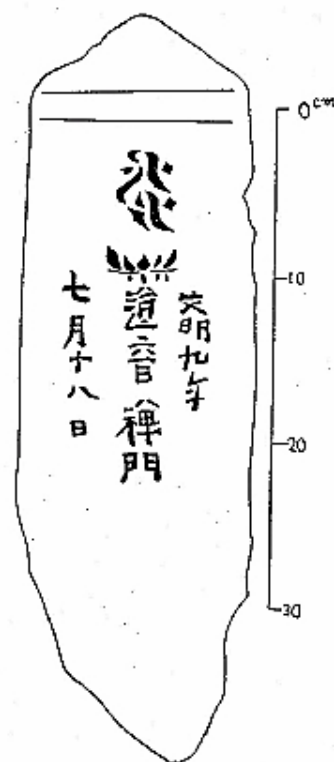
— 8 —

13. 文明9年(1477) 7月18日

弥陀一尊種多板碑



文明九年
道音 禪門
七月十八日



※ 道音禪門という戒名を
持つ男性が、文明9年
7月18日に逆修供養
したものであろう。
この板碑には、二条線
が刻まれていない。

14. 文明9年(1477) 10月

弥陀三尊種子板碑

文明九年
應妙禪尼
逆修
十月日

※ 応妙禪尼という戒名を持つ女性が、文明9年10月に逆修供養したものである。蓮台上部に花心がみられる。

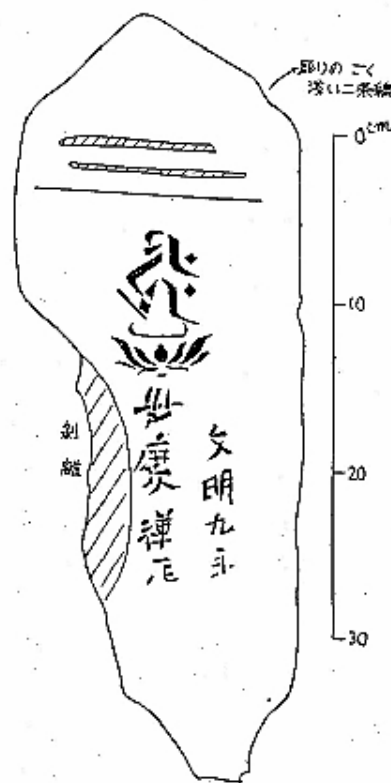


15. 文明9年(1477)

弥陀三尊種子板碑

文明九年
妙慶禪尼

※ 妙慶禪尼という戒名を持つ女性が、文明9年に逆修供養したものであろう。蓮台の上部に花心がみられる。

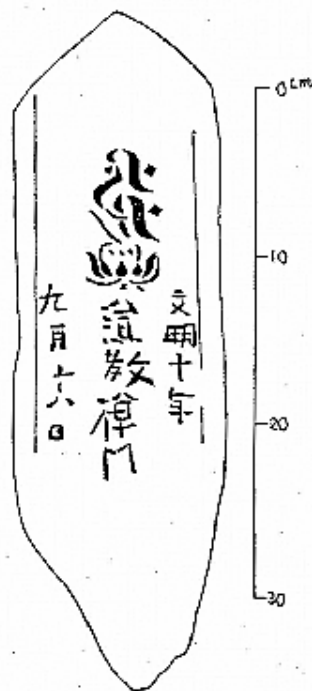


16. 文明10年(1478) 9月18日

弥陀-尊種子板碑



文明十年
道教禪門
九月十八日



※ 道教禪門という戒名を持つ男性が、文明10年9月18日に逆修供養したものであろう。蓮台上部に花心がみられる。板碑の上部には二条線が刻まれている。

—10—

17. 文明18年(1486)

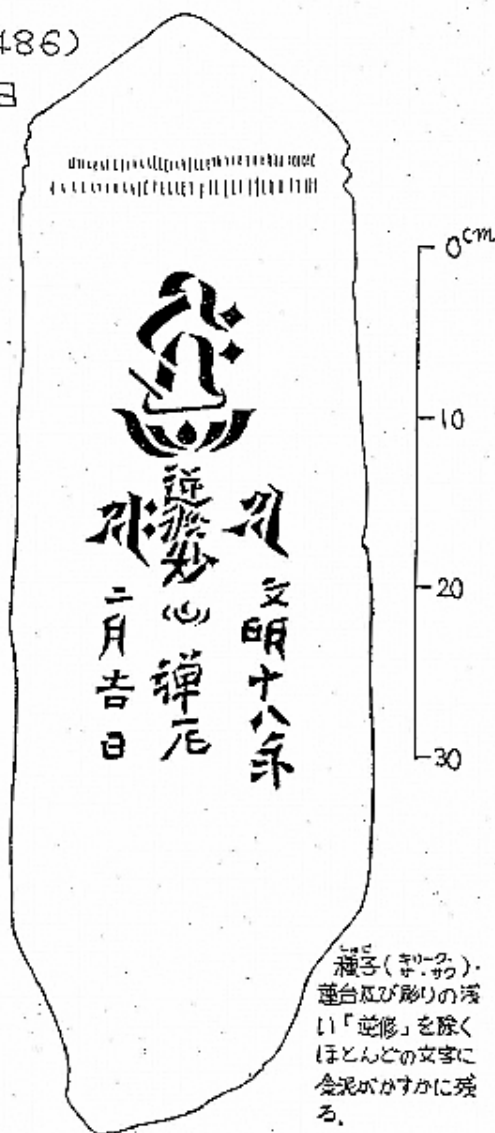
2月吉日

弥陀三尊種子板碑



文明十八年
逆修妙心禪尼
二月吉日

※ No.3とNo.7で前述した妙心禪尼が、文明18年2月にも逆修供養したもの。板碑上部には二条線らしきものが刻まれている。蓮台上部には花心がみられる。



種子(きんご). 蓮台及び彫りの浅い「逆修」を除くほとんどの文字に会釈がみられる。

18. 文明19年(1487) 5月17日

弥陀三尊種子板碑



尼 尼

五月十七日

道
禪
門

文明十九年



五月十七日

道
禪
門

文明十九年



19. 文明19年(1487) 10月22日

弥陀三尊種子板碑

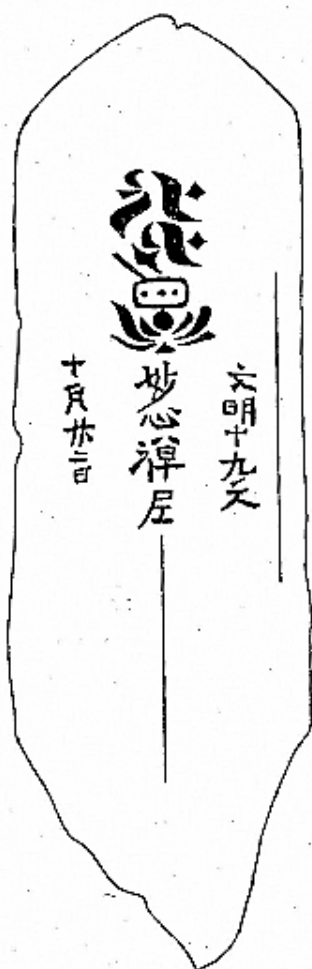


十月廿二日

妙心禪尼

文明十九年

種子・蓮台・文字「禪」に金泥跡が残る。



十月廿二日

妙心禪尼

文明十九年

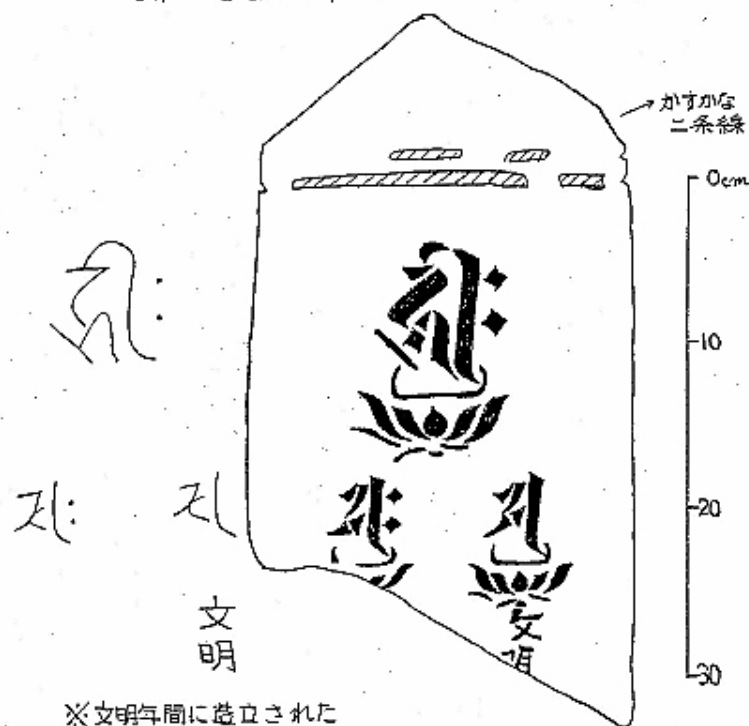


※No.17の妙心禪尼が
1年後の文明19年
10月22日にも逆修
供養をしている。
蓮台上部に花心がみ
られる。この板碑は
二条線が刻まれてい
ない。

※□□禪門という戒名を
持つ男性が、文明19年
5月17日に逆修供養したものであろう。
蓮台上部に花心がみられるが、(●●)のような描き方は後期にみら
れる特色である。この板碑には二条線が刻まれていない。

20. 文明年間

弥陀三尊種子板碑

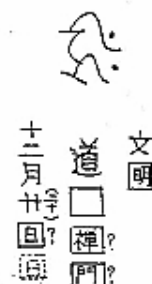


※文明年間に造立された
弥陀三尊種子板碑であ
る。上部の二条線が、
かすかにみられる。

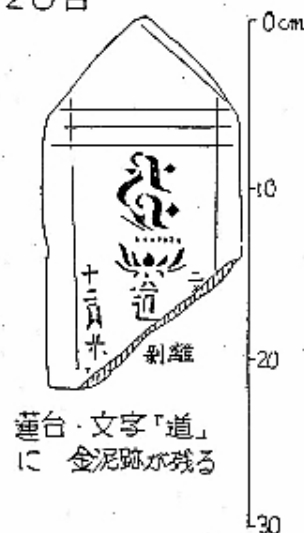
※脇侍の観音の梵字「サ」に
金泥跡が残る

21. 文明年間 12月20日

弥陀一尊種子板碑



※ 道□□□という戒名を持つ
男性が、文明年間に産修供
養したものであろう。「妙」
の字は女性の戒名の中で使
われるが、「道」の字は男性
の戒名の中で使われる。
この板碑は二条線が刻まれ
ていない。



蓮台・文字「道」
に 金泥跡が残る

22. 明應8年(1499)正月18日

彌陀三尊種子板碑



此 明應八年
正月 妙枯禪尼
田? 八日



0cm
10
20
30

※ 妙枯禪尼(女性)が
明應8年1月18日
に逆修供養したもの
であろう。この板碑には、二条線が刻まれてい(ない)。

=年号不明の板碑=

23.

正月一日 妙心禪尼 田



0cm
10
20
30

24.

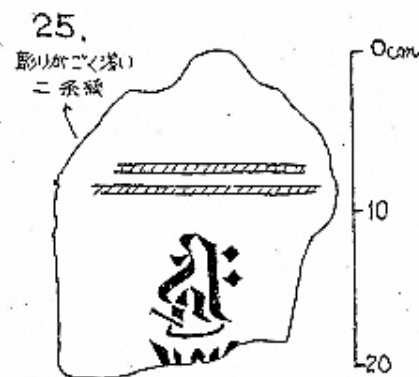
六月十八日 淨教禪門



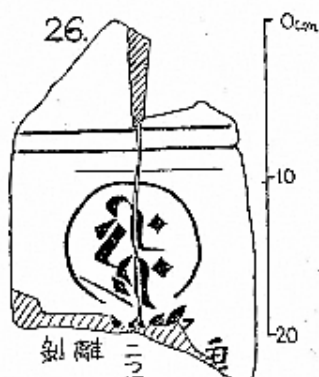
0cm
10
20
30

= 一部解読できる欠落した板碑 =

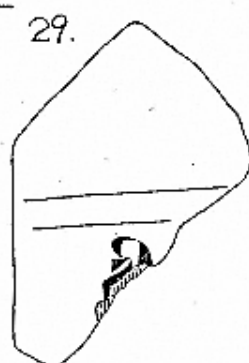
—14—



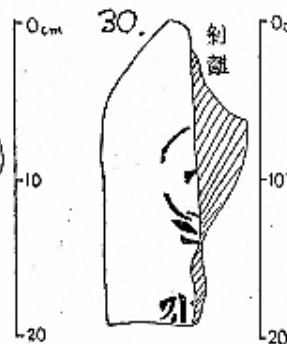
弥陀一尊種子板碑



弥陀一尊種子板碑



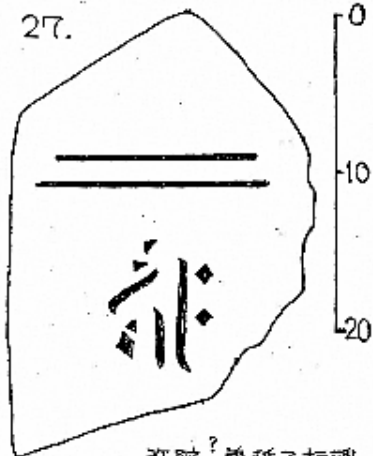
弥陀種子板碑



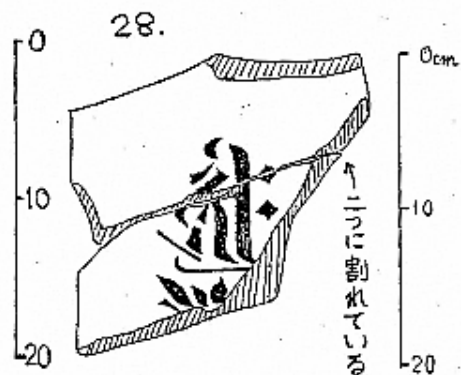
弥陀三尊種子板碑



不明
『十一月十八日』
の文字あり

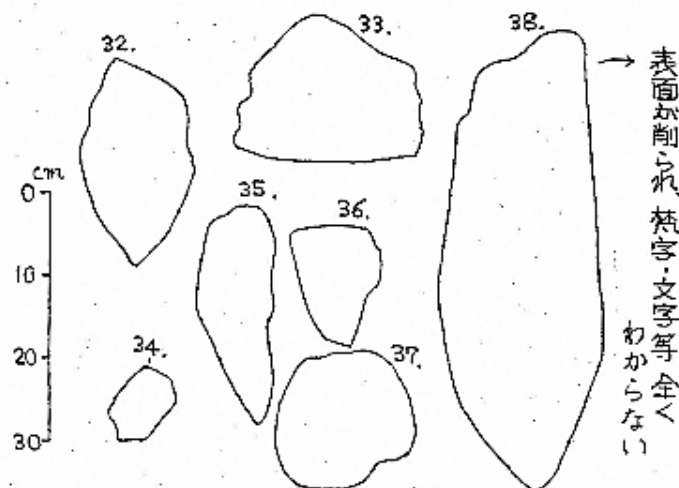


弥陀一尊種子板碑



弥陀一尊種子板碑

= 破片・その他 =



→ 表面が削られ、梵字・文字等全く
わからない

平成元年9月10日

②江戸時代の上流くま茶屋 小島 誠

この絵図は、盛岡の南部藩主が、寛延四年（一七五二）江戸・盛岡間の宿場を主とした街道の名所・旧蹟・名物・名産・土地風景、山川草木・居城・館・里邑・神社・仏閣・堂・一里塚等にいそろまびき描かせる道中絵図の中の「上間久里の茶屋」（新編武蔵風土記稿）によると「鰻屋は三軒」付近です。この絵図の説明を再現すると次のとおりです。上段右より

大百姓次

門

樹木

大木

竈

此裏小堀之有候 いけすにいつも数千うなぎ

かこい置候 なますも之有候 うなぎより劣

り候 木竈 上まくり村 青木めく

此塚 （一里塚）

下段右より

古川水草多し 麦畑多く之有候 名物

うなぎ蒲焼 筋骨つよくし且つ精気をますよ

し 食性能毒に出たり 酒肴色いろ之有候

百姓屋村 樹木巡り 候 広々たり

この 茶屋の中に「秋田屋」と称する屋

号の家あり当家に伝えられるところによると
秋田の佐竹候が参勤交代に屢お立寄りになり
命名されたとのことです。

諸、現状からみるとあの場で川魚料理がと
思われますが、左上の地図を御覧下さい、
これは国土地理院で、昭和四十五年に調査し
た土地条件図を基に当時の川を想定したもの
のです。この青色の曲線が元荒川で、上間久
里・下間久里・大里各村の西側を迂回してい
たのです。この流れの瀬替えは、宝永三年（

一七〇六）で、この絵図を描く四十五年前の
ことです。従って、この絵図を描く時は既に
流れを失って沼となっていました。文化三年
（一八〇六）完成した江戸幕府道中奉行によ
る精密調査の日光道中分間延絵図には
元荒川沼と記されています。

猶新編武蔵風土記稿によると上間久里の小
名（小字）に八軒茶屋とあるがこの地のこと
です。

③ 林泉寺の三田崎氏五輪塔

鈴木 秀俊

名木「駒止めの榎」で知られる大字増林、

林泉寺の本堂左側境内に、木立に囲まれている

つりりと一對の五輪塔が建っている。この五

輪塔は、二基とも高さ二、五メートル余の立

派なもので、塔前には一對の燈籠がある。

右側塔の正面には「心光院本誓岳法道雲居

士、台座側面に万治二己亥年十二月十五日

とあり、台座裏面には廢滅のため解説し難い

文字もあるが、次の銘文が刻まれている。

越前大守義景卿旗下、元祖朝倉氏 從三田

崎六郎入道景長四代之裔、関根亦兵衛尉景

行宝塔

依当寺□引導□□菩提

施主 大沼作右衛門尉景房

と判読できる。三反崎家の由来について、新

篇武蔵風土記稿には次の如く記されている。

越前朝倉氏の支流である。近來故あつて、

大沼を氏とした。永祿、元龜の頃、先祖朝倉

六郎は宗家左衛門督義景に従い、越前三田ヶ
 崎城にあり三田ヶ崎を家号とした。天正元年
 義景滅亡の時、刀根山合戦にて討死。子八郎
 左衛門は度々軍功顕す。中でも加州小松口合
 戦には一番槍を合せ、敵兵を三段ばかり突退
 し故、義景感状を与へし時三田崎を三段崎と
 書く、これより三段崎を号とした。義景滅亡
 の時、義景の幼息受王丸に供奉して越後に行
 き、上杉輝虎に託す。輝虎が北条氏康七男景
 虎を養子とする時、證人として喜平次に従い
 小田原に赴き、北条氏の家臣になつたといふ
 小田原没落の時入道して道門と号した。此時
 家康の陣中に召され、十三才の子三段崎新八
 郎と共に参謁する。新八郎は父の武功により
 召出され、太刀一腰黄金十兩を賜わる。秀康
 の家臣となり、命により三崎新左衛門と稱し
 た。大坂二度の役に出陣、忠直豊後へ国替の
 時退身する。子六郎左衛門も同じく浪客とな
 り万治中に死す。其子作右衛門元祿中死す。
 其子作左衛門当所（松伏町上赤岩）に土着す。

④

神佛混淆時代の祭祀体

高橋清

祭祀体

木製、鏡のかたぎ

祭祀目的

遷宮の儀式

祭主

別當 万蔵院 法印快巡

年代

元文二年三月（一七三七）

ところ

越前村丸の内（新川町一丁目）

所蔵

新川町一丁目箱荷神社

説明

明治維新以前を神佛混淆時代と謂う。神佛

混淆とは本地垂迹（はんちすいじやく）説に

基き神佛を区別せず一つところに配祀する思

想から発する（平凡社発行世界大百科事典）

表書 左の如し。

箱荷神社の社殿が新築造

営せられ遷宮の儀式のとき

の祭祀体（御神体）であ

る。祭主は箱荷神社隣地

にあつた万蔵院と謂う寺

の住取、法印快巡が遷

宮の儀式をとりしめた

体

五

字

背

遷宮導師法印快巡

元正一位箱荷大明神

元文二年己三月吉日

別當 万蔵院

裏書

梵字三十七

梵字は佛教の如來、菩薩等諸佛を示している。

これは佛教のつまんだうしを意味した

梵字である。

表には佛（梵字壽と氏

神を配し裏には佛（梵字三十七体）を同一配

祀する。神佛混淆思想をよく現わしている

ものと言えらる。（觀照院住取實津憲道氏談）

神佛混淆を裏ナける二五〇年前の祭祀体が

現存しているものとしては数少ない資料ではな

かろうか。

なお「權大僧都法印快巡」は十五年後の室

暦二年（一七五二）没したもようでは養老が

今も万蔵院境内にある。

⑤ 七左町・観照院の山門について 名倉さわ

古木の伏木の松が山門を隠すように横たわっている。

参道の奥に突き当たると萱葺屋根の山門がある。昔語りにある古い屋根作りである。その古さが又寺の歴史につながっているであろう。

観照院は会田七左衛門政重の、開基と伝えられている。政重は寛永十九年（一六四二）に没している。

政重の法名から、寺の名称を日映山観照院と言う。山門は越ヶ谷会田出羽家の門を移したものと伝えられ由緒のあるものである。

山門の前にバス停がある。奥まった参道より松の茂みに見える萱葺屋根は、寺全体の重みを与える。萱の無くなった昨今、年代の月日に朽ちる山門の萱替えを、寺と檀家共々昔を偲び守り続けている。

山門を入ると弘法大師（一千五十年忌）の自然石の大きな供養塔がある。また長い間の風化にその銘は読み取れない一基の宝篋印塔もある。本堂に入ると政重夫妻の木像が一对安置されており、市の文化財の指定となっている。

この付近の新田の開発に力を入れた七左衛門政重にちなみ、この地域を七左衛門村と称され、現在は越谷市七左町となった。しかし会田七左衛門政重の墓は、観照院にはなく、市内神明町にある。

⑥

十九夜塔

丸田富夫

所在地 越谷市花田 西円寺

十九夜講は小字単位でつくられている月待の女人講である。庚申講が男子ばかりの講なのに反し十九夜講は女性ばかりの講である。十九日の夜当番の家がお堂に集まって、多くは如意輪観音の軸を掛け、般若心経、ご詠歌、和讃、真言、などを唱え安座を祈り、女性死後落ちると言われている血の池地獄から迷える折願の勸行を行う。勸行が終わると飲食雑談して、月の出を待つ。

埼玉県では県の東部羽生市より東、千葉県に隣接する地域に多く分布している。十九夜塔の造立年代は今まで見たところではいずれも江戸時代後期のもので、古いものは如意輪観音像である。文字塔では「十九夜」「十九夜塔」「十九夜供養」「十九夜念仏供養」などがある。如意輪観音は受苦の衆生に、苦を除き、財宝を授け、その願望を成就させる変化観音で六観音中に列せられている。

果立浦和四音館・時霞文庫竹蔵の越谷名所絵	葉書について	◇時霞文庫	現伊奈町の加藤家は寛永年間旧羽黒村に	移住されてから代々名主・村長などをつと	めてこうれた名家です	その川代・岸太郎女は村会議員や村長など	の公取のかたわう旅をけけさきさき父と	味に通じ読書とたのしみよく秋文の稿を	おこしノートとにくわえてこうれきいた	自ら時霞村人との予えられた岸太郎氏	は明治27年頃から文庫作家的様態をもち	付・先々代の蔵書とくわえて時霞文庫とい	う果書とされまいた	粒未拘・蔵科音かう国史資料・綿製の子	本・版木も少なからず含まれその他一般	初・途はかきにいたしまで舟倉に収束保管	がなこれています	◇越谷名所絵葉書	年代別には大正初期の頃のものと思わ	れまうが当時の近郊観光地としての越谷の	ようすがしのばれます
----------------------	--------	-------	--------------------	---------------------	------------	---------------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	---------------------	---------------------	-----------	--------------------	--------------------	---------------------	----------	----------	-------------------	---------------------	------------

建長元年板碑

越谷市郷土研究会理事 山崎善司

所在地	越谷市御殿町 4450 -4 番地先 元荒川堤防上
形態	青石塔婆（板碑） 高サ 155cm 幅 56cm 下欠
刻銘	種子 梵字 弥陀一仏 建長元年（1249年）
文化財	昭和45年3月25日 越谷市指定 有形文化財

越谷市役所より、北北西 約 400m に宮前橋がある、橋際を左折すると間も無く、二又路が在る。ここを右に進むと、右側（川側）3軒目に御殿稲荷が在る、その隣の田の中に、「建長元年」銘記の青石塔婆（板碑）が建っている。

旧は二又路の所に在ったが、市指定の文化財と成った時に、今の所に移転して建てられた。

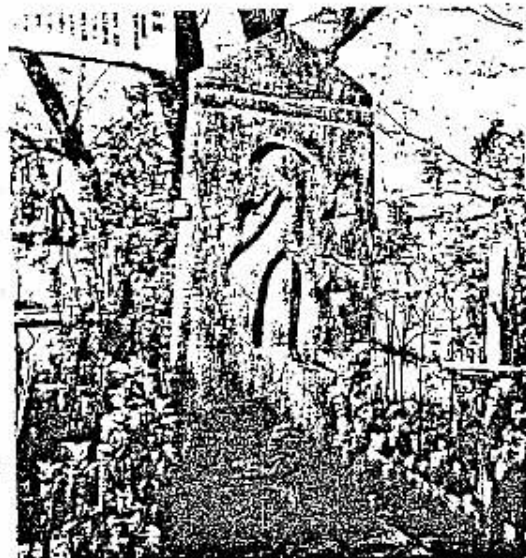
越谷市御殿町元荒川堤防上に建つ、建長元年銘記の、青石塔婆（板碑）は、市内発見の板碑の中では、最古・最大のものである。

高サ 155cm と在るが、下欠して居るで原形は、200cm を越すと推測出来る立派なものである。
種子 梵字 阿弥陀一尊 薬研彫で彫は深く雄大で、鎌倉期の板碑の特徴を良く現している。

この板碑の建立に付ての、確たる記述は、今の所発見されて居ない。

1. 地形から見て、旧所在地は嘗ては、天嶽寺境内か、或は其の隣接地である。
2. 鎌倉時代、越谷の地に居住した「古志賀谷氏館跡」と思われる地の隣接地である。

「古志賀谷氏」に付いては、以下「古志賀谷氏の終焉に付いて」を参考に記す。



資料No1 現在の建長板碑